武家名目抄稿

甲冑部

四

和書門
二九二〇六 類
七七 函
九 架
四九 冊

内閣文庫
和書
類
二九二〇六 號
四〇六 冊
五三 函
一三 架

内閣文庫
番號 和 25206
冊數 457 (312)
函號 153 275

内閣文庫

武家名目抄稿第四冊

甲冑部三目録

革鎧
羊革鎧
牛革鎧
草短甲冑
草能鎧
草具足

国立公文書館
National Archives of Japan

責草具足

金鎧

鐵鎧

鐵交鎧

大鎧

小鎧

札能鎧

様具足

様甲冑

重鎧

歩具足

番具足

ヒヤウシ鎧

シカヘシノ鎧

国立公文書館
National Archives of Japan

武家名目抄稿第四冊

甲冑部三

草鎧

續日本紀云宝亀十一年八月庚戌勅今聞
諸國甲冑稍經年序悉皆多朽中用三年上
度立例修理隨修隨破極費功役今草之為
甲冑固經久裂軽便中箭難貫計其功程
殊亦易成自今以後諸国所造年料甲冑皆

宜用草即依前例毎年進様但前造鐵甲不
可徒爛毎經三年依舊修之
又云延暦九年閏三月庚午勅為征蝦夷仰
諸国令造草甲二千領東海道駿河以東東
山道信濃以東国別有數限三箇年並令造
訖
三代実録云貞観八年五月十九日壬戌太
政官處分停伊勢越前加賀越中丹波丹後
因幡播磨備中等九国年貢馬草百張造兵
司修理年料甲百領令諸国貢馬草二百張
以充彼料貞観五年減修理五十領半折輸
雲
延喜民部式云凡諸国所進兵庫寮修理甲
料馬革者尾張六連近江十七張美濃廿四
張但馬十二張播磨卅二張阿波十張並以
驛傳牧等死馬皮熟而送之若不足者賈備

満數其直元正稅

又主稅式云修理器仗料若干東甲若干奥

料若干東牛皮若干張奥別若干張價若干東張別

若干東諸色准此此各為一頃

羊革鎧

牛革鎧

三代實録云貞觀十二年三月廿九日辛巳

從五位下行對馬守兼肥前權介小野朝臣

春風奏言故父從五位上小野朝臣右雄家

羊革甲一領牛革甲一領在陸奥国去弘仁

四年賊首吉弥侯部止彼須可牟多知等逆

乱之時右雄着被甲討平殘賊厥後兄春枝

進之望請給羊革甲以充警備歸京之日全

以進官詔許之其牛革甲給陸奥權守小野

朝臣春枝

革短甲冑

三代實録云元慶五年四月廿五日壬寅出
羽国元慶二年夷虜所焼盗草短甲三百三
十七領冑五百三十二枚鐵鉢一百五十七
枚草鉢五十枚木鉢三百二十六枚
延喜主税式云造革短甲冑一具料鐵六二
斤牛革三張並牛馬革鹿革各一張並頸大
牒料帛一條長三尺五寸廣一尺三寸調布一條長三尺
一尺五寸綿一斤纏頸牒料絲一分芦二兩懸緒
料鹿革五張漆四升絞綿二兩商布一尺
革能鎧
俗文抄云白河院御時伊賀守
胸板かけすの射徹し條る矢の伊賀守射四
の袖ゑ裏迄てを立てるる六郎八矢
博士家て永ゑ伊賀守此矢を射るしに
大将軍乃ゑ小弟八郎信盲刃の矢信後
ゆへ九史の不乃ゑ兄ゆへ六郎既上元

作あり申さは安義寺を始く山矢茂入る
云々皆吉を拾く恐ける京綱申ける
は彼之祖八幡殿後三年の合戦の時分
国金沒の時なれは神則の中けるは君の信夫
に申る云鎧境を射徹されをと云事あし
孫秀の信ら勢をたしうふ陣をなりは
と申を申を云義家草摺を領をうる丈
の敵之を云六宇を射徹ト弱者は鬼神

の変化とそ恐をきをる
草臥豆
後拾遺正紀云是程は異を英尺しく甲斗
うつうに甲の脱云ふを二人うに白き孫一をの
ふをををを者を二中三て拾遺ハ者一信正常
宮ふハ他意の是程を皮異ををきを甲はうう
にしてあをしし皮の笠文を百年紀の笠をうる
をををうう者之皮異をきても頭を行をうう

[illegible]

責革異足

三河紀ニ大久保次郎[illegible]ハいやしく[illegible]
[illegible]ハ一人もすゝ[illegible]の[illegible]
[illegible]

ひ也我[illegible]

ひゝ[illegible]

金鎧

吾妻鏡ニ治承五年五月八日癸未園城寺
律師房日胤弟子僧日惠号仲公参着于鎌倉
彼日胤者千葉介常胤子息前武衛御祈禱
師也仍去年五月自伊豆国遠被付御願書
日胤給之一千日令参籠石清水宮寺死言
而令見讀大般若経六百巻之夜眠之内自

宝殿賜金甲之由感霊夢

又云治承五年九月廿日下云光倫申云去

月十九日依平家申行為東国叙位祈請任

天慶之例被奉金鎧於神宮

又云養和元年十月廿日條云去月十九日

依平家申行為東国帰往祈請任天慶之例

被奉金鎧於神宮

百練抄云養和元年九月十三日金銅鎧被

進大神宮依天慶例也

鐵鎧

続日本紀云宝亀十一年八月庚戌勅今聞

諸国甲冑猶經年序悉皆多朽中用三年一

度立例修理隨破極費功役今草之為

甲宰固經久裳躬軽便中箭難貫計其功程

殊亦易成自今以後諸國所造年料甲冑皆

宜用草即依前例每年進様但前造鐵甲不

可徒爛毎経三年依舊修之

又云延暦十年六月己亥鐵甲三千領仰下

諸国依新様修理国別有數

続日本後紀云承和十一年正月己丑山城

国上鐵甲一領云件甲裳冠袋添看喜野川

延喜民部式云交易雜物太宰府蓋黒漆鞍

十具鉄鎧廿隻

年家物語云 横田行京 合戦條 八月七日官軍にて

大仁を分て大小ふ見たる物迫討の儀を

国々九月一日紀氏迫討の例を伊勢へ

弾の羅甲を出しらる

鐵交鎧

京師物語保元物語云 中の殿 為朝 討條 彼為朝祖父八幡太

郎義家真任追討の時為朝を義家武則の勅

旨にくくるまたの羅を領を為朝よりけく

射徹したりしを四きその孫なれを

[illegible]

大鎧

平治物語ニ行隆ノ軍條

[illegible]申し[illegible]信濃卿[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]大の男の大[illegible]

[illegible]

[illegible]

源平盛衰記ニ高綱渡字治川條

信濃国住人根井

大弥太行近ト名乗テ褐直垂ニ小櫻威腹

巻ニ洗皮ノ大鎧ヒ重テ三尺六寸ノ大太

刀ニ廿四サシタル黒ツ羽ノ征矢負テ白

星ノ五枚甲ヲ居頭ニキ

太平記ニ山門攻條

備後国住人江田源八泰氏

ト名乗テ洗革ノ大鎧五枚甲ノ緒ヲ編四

更餘ノ太刀所〻サヒタルニ血ヲ付テマ
シクラニヲ上タリケル人々
又云 畑六郎左衛門條 彼畑六郎左衛門ト申ハ武
廿二ノ廿オ
藏国ノ住人ニテ有ケル力歳十六ノ時ヨ
リ好ニ相撲ニ取ケル力坂東八箇國ニ更ニ勝
者無リケリ中略物ハ以類聚ル習ヒナレハ
彼力甥ニ所大夫快舜ト云シモ不劣悪
僧アリ又中間ニ悪八郎ト云鉄辰ナ大力

アリ又大獅子ト名ヲ付タル不思議ノ犬
一匹有ケリ此三人ノ者共闇ニタニナレ
ハ或帽子甲ニ鎖ヲ著テ足軽ニ出立時モ
アリ或ハ大鎧ニ七物持時モアリ様々質
ヲ替テ敵ノ向城ニ忍入云〻
悪仁号記云 多武峯会戒條 大力大猛大夫件の大長
力を以て打くなんと〻る成四村の出雲中
地蔵の大力あと人作出雲〻力坂あ

へき所にも候ふ此松等に住せられ給へ
とて、あなまていふなりといへとも究
後時延まり太刀打きれしく猿切りの口惜き
次第なりけんとて（中略）代伝へける大鎧又我かの
一代の所を尽しく思継威しける大鎧二
領そへて着なまされけり此小具足は
無用也とて例の大長太刀横抱て（注之）さ乃者
坊渕入る具し木戸を開きて出向はれ出る

自ら名のへ殺と行と見へし

奥羽永慶軍記云 鳥屋ケ崎夜討條 変ニ松庵寺ノ
住僧赤頬存泰ト云ル悪僧大鎧ヲ着シ大
長刀ヲ打振テ逃ル敵ニ追スカフラ追攻
追攻切タリケリ

小鎧
源平盛衰記云 義経院参條 蝶ノ圓ノ直垂ニ紫
生絹ノ小冑ハ同国（武蔵）住人河越太郎重頼カ

子息ニ小太郎重房生年十六歲トニフ

札能鎧

手氣為信ニ（本ノ誤カ 後條）中ハモ色ト名白ク髮
長ク容顏美麗ナリ其家ニ宝ノ
ニ物ノ兵ヲ所持ス其ノ所ニ
ハ神ノ如キ一人ノ女ノ子也
ハ軍ト云ヒ八ツ[illegible]ヲ張ヲ作リ大
ナ杖ヲ一方ノ大ナル石ニ立ケル

様具足

甲陽軍鑑ニ（勝頼氏改 後條）安房ヲ具足ノ胸板ニ
矢疵ニツ夢想ニ二ツアリ仏物
ノ名ヲ具足ニ名ヲ付ル府ヲ
ヌ事ナシ云々

攪甲冑

続日本紀云天平宝字五年八月甲子（廿九）迎藤
原河清使高元度等至自唐国初元度奉使

之日取渤海道隨賀正使楊方慶等往唐国
事畢欲帰兵仗櫟甲冑一具代刀一口槍一
竿矢二隻分付元度

重鎧

太平記十一ノ巻云越前府軍條葉原ヨリ深雪ヲ分テ重
鎧ニ肩ヲヒケル者共數刻ノ合戦ニ入替
勢モナク戦疲レケレハ返シトスルニ力
尽キ引ントスルニ足タユミヌ

又云山徒寄京都條両六波羅是ヲ聞テ思ニ山徒
雖大勢騎馬ノ兵一人モ不可有此方ニ
ハ馬上ノ射手ヲ撰ヘテ三條河原ニ待受
サセテ懸開懸合セ弓手妻手ニ著テ追物
射ニ射タラン人ハ山徒心ハ雖武歩立
ニ力疲レ重鎧ニ肩ヲ被引方時力間ニ疲
ルヘシ是以小碎大以弱拉剛行也トテ七
千餘騎ヲ七手ニ分テ三條河原ノ東西ニ

陣ヲ取テソ待懸タル

叡井日記云（丹波家藝州毛利家使者條）其後御暇乞ノ

タメニ當家ノ衆別所衆輝元ヘ對面ノ候

テ御念比ノ次第ニテイヨイヨ神慮ヲカ

ケテ三家ハ善悪トモニ一同ノ存念相違

ナキノ旨ニテ候御盃ノ上ニテ面〻衆ヘ

名物ノ御太刀賜リ申候畑牛兵衛一人ハ

実ヨキ重鎧ヲタマハリ候

歩具足

藤葉栄衰記云角テ盛隆公安積高倉ヘ被

向御馬（中略）御馬廻御歩行ノ衆火威ノ歩具

足ニ袖ナシノ紅ノ羽織ニ大十ル金ノ九

ヲ後ニ付テ腰指ニハ金ノ團扇ヲシテ二

三百人前後左右ニ付隨云〻

番具足

見聞雜録云正月廿二日薩摩嶋峠ヲ取〻ル〻

一 黒皮の事異説 六百十領

ヒヤウシ 鎧

剝皮也頭書云 七佐坊堀内へ書る條 むかし坊 六条九座とか
ふしうりきうりこりよひハあるけとやらん頭り外
らきぬるやきてもとさり京にまそつし 皮のか
されたつのなやめくりきくへらきちやと思ひなれ
まろさみすりみ志とろ有る如やうしまろひあ
さうゑよりにゐ大きもちちたゐわうちつきく

うあしさまさて皮のうえへからさしくとしてて
系り事係

按伊勢貞丈ヵ平義器談云 ひやうし鎧の事
伊勢家にて革摺の志とろなるといふまより
てられたる馬の歩むに陸まてく拘るよく草
摺の修する音あるをいへるをやいふしへの鎧
はくさすりの裏より草をもたちもあてを
ハ馬の歩むにりく陸まてく革摺鳴りて音あ

多へし

シカヘシノ鎧

職人尽歌合云 鎧細工歌 きてうしともくひは

いとやぬる鎧さね〳〵くさとわうきを

ぬきてあと

又云きてうしのねはさねらっきてうきく

云〳〵

物きてうし鎧は男用の鎧ふるくきてう事

用ふ立うあるをきてものめく きてうへ出きるを

いつも也

武家名目抄稿第四冊

圖書寮文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan